

令和8年度第1回 山口大学大学院人間社会科学研究科(修士課程)
臨床心理学専攻

専門科目（心理学・臨床心理学）解答例

掲載にあたって

※試験問題の公開にあたり著作権保護の観点から、問題文を掲載していない場合があります。

※解答例（または出題の意図）についての質問・照会には一切解答いたしません。

※「正解・解答例」については、あくまで解答例を例示したものです。

※一義的な解答が示せない記述の問題については出題意図のみを公表します。

心理学

1. 系統誤差とは、測定の繰り返しに対して一定の値で生じる誤差であり、例えば測定器の個体差による誤差がある場合である。偶然誤差とは、測定の繰り返しに対して測定ごとにばらつく誤差であり、例えば測定器に偶然付着したほこりが原因の誤差がある場合である。
2. 検定の多重性とは、検定を繰り返すことで第1種の過誤の可能性が増えることを指す。多重比較法では、検定の繰り返しの数に応じて有意水準を厳しく設定するといった方法で検定の多重性の克服が試みられている。
3. 赤色のインクで「青」という文字が書かれていると、文字の色を答えるまでに時間がかかってしまう。このように文字の色と意味が矛盾するときのように、同時に目にする2つの情報が干渉しあい、認知や反応が遅くなる現象のこと。
4. 内集団バイアスとは、外集団に比べて、自身が所属する内集団を優遇する心理的傾向を指す。内集団バイアスが生じる理由にはさまざまなものがある。
たとえば、Tajfelらの社会的アイデンティティ理論では、人は社会的アイデンティティを通じて自尊心（広い意味での自信）を高揚させると想定しており、そのために内集団バイアスが生起すると想定している。
5. サクセスフル・エイジングとは、成人期や老年期において、例えば、流動性知能が低下してきても ICT デバイスを効果的に用いることによって結晶性知能を維持したり、世代を超えた社会関係を持ち続けたりするというような選択的最適化によって主観的幸福感を高めるあるいは維持するいわゆる幸福な老いのことをいう。サクセスフル・エイジングはバルテスによってその概念が提唱されたが、近年、社会における不透明性が高くなるとともに、成人期、老年期が1960年代よりも大幅に長くなっているため、生涯を通して変化に対応し続けることが求められ、とりわけ充実した老年期の規定因に関する発達心理学的研究は意義がある。また充実した老年期は人生の終末期の充実度にも直接的に影響する。

6. 叱るという教育的介入は罰を与えるということに対応する。罰は学習者にとっては嫌悪刺激あるいは恐怖刺激に相当する。そのため、教育的介入としての罰は嫌悪刺激となる可能性がある。嫌悪学習は非常に少ない回数で成立し、効果も長期的である。以上のプロセスによって、学習者を学習活動から回避させてしまう効果が予想される。また、刺激強度の飽和化によって罰自体の効果がなくなってしまうため、学習者自身のネガティブなパフォーマンスを定着させるような教育的介入となる可能性がある。

臨床心理学

1.

1)

T e l l : 相手のことを心配していることを、はっきりと言葉にして伝えること。

A s k : 相手が抱えている死にたい気持ちについて、はっきりと率直に尋ねること。

L i s t e n : 相手を感じているどうしようもない気持ち、絶望している気持ちなどについて、聴き役に徹すること。

Keepsafe : 危険であると感じた時には、安全確保をすること。

2)

(1) 気づくこと：周囲の人や家族の変化に気づいて、声をかけること。

(2) 傾聴すること：相手の気持ちを尊重し大切にしながら、相手の話に耳を傾けること。

(3) つなぐこと：早い段階で専門家に相談するよう促すこと。

(4) 見守ること：温かく相手に寄り添いながらじっくりと見守ること。

2.

1)

低体重で、肥満恐怖があり、ボディイメージが障害されているなどが挙げられる。しかしながら、体重が増えることを避ける行動や、低体重の状態になっていることについて深刻さがなくそのまま食べることについての制限を繰り返したりする。

2)

繰り返し過食のエピソードがあり、嘔吐したり下剤の使用など体重を増加させないような行動があり、これらの行動が平均して3ヶ月にわたり少なくとも週に1回は行われており、自己評価は自身の体型や体重による過度の影響を受けている。

3)

・疾患に伴う身体症状（低体重，生理不順，低栄養状態，貧血など）について理解し，医学的アプローチと合わせて行うこと。

*医学的アプローチ「を踏まえて」「と連携して」

・希死念慮，自殺企図，自傷行為などの衝動的な行為が生じる可能性を理解しておくこと。

・自己肯定感の低さや否定されることへの恐れを理解し，丁寧に関係を構築していくこと。

以上のような点について，対応する上で留意すべき点と考えられることを記述すること。

3.

1) 多重関係とは，臨床心理面接におけるクライアントとセラピストの間で，面接関係のほかに，例えば，家族，友人，知人，同僚などの，異なる関係もある状態のことを言う。また，例えば，セラピストが面接場面以外でクライアントと食事をしたり，金銭の貸し借りをする状況がこれにあたる。

2) 守秘義務とは，臨床心理面においてセラピストが知り得たクライアントの情報について，クライアントの了解を得ずに他者や他の場所で話題にすることは，原則，してはならないという義務のことである。セラピストが勤務している現場の上司（学校現場であれば校長等）などが，業務管理の目的で，誰と面接をしていたのか，などの情報を装束することが決められる場合に，コンフリクトが起きやすいと言える。

3) インフォームド・アセントとは，治療的介入や研究などの状況において，対象者が子どもである場合，可能な限り対象者が理解できるような方法を工夫して説明することによって，対象者に同意，参加の意思を確認することである。

4.

1) 力動論とは、心には3つの審級があり、これらの力関係で心的現象を説明するものである。まず自我は心の中心的な機能であり、エス（イド）と超自我とを調整して言動として表出したり表出を控えたりする働きをしている。その際には、外的な現実の状況を捉えつつ、無意識の防衛機制も働かせながら内外のバランスを取る働きをしているのが自我の役割だと言える。また、エス（イド）は、本能衝動や願望の審級であり、一方超自我は、すべきこと、すべきではないこと（または理想的なこと）を自我に突きつける役割を果てしており不安を喚起することになる。このように、3つの審級の力関係や動きから言動を理解するのが力動論だと言える。

2)

- ・（エス（イド））：Aさんは、本当は自分の論文について遠慮なく考えていることを主張したいのに、
- ・（超自我）：指導教員から叱られたり、ダメだと指摘されるのではないかと不安になって、
- ・（自我）：言いたいことを言えずに黙ってしまっている（自我）。